

「なぜ仏法を聴聞するのか」

あるご法座で私の法話が終わると、参拝席にいた七十代ぐらいの男性がスツと手を挙げ「三つ子の魂百までという諺がありますよね。還暦は赤ちゃん返りといえますよね。どのように考えたらいいでしょう」と質問されました。その時の私の法話の内容は「阿弥陀仏の本願他力は私たちの我執の壁を破って新しい空気を入れる。そのようなはたらきがあります」という結びでした。その質問された男性からすれば「他力の教えに出遇うほどに我執、煩惱が破られるのであるならばどんどんきちんとした人間になっていくのではないのですか。世間でいう三つ子の魂百までの諺のように人の性根は変わらないこととの矛盾が生じませんか」との意図があったのでしよう。その時私は慌ててきちんとした回答が出来なかったことを今でも悔やんでいます。

私たちは聞法した時に「ああ、そうであったか」と自分の姿に気づかされます。しかし、困ったことにその気づきがまた日常の中で薄れ、いつのまにかまた煩惱に振り回されている私があります。だから、浄土真宗では生涯聞法と言うのです。日常の中でお念仏の時間やお寺参りをして常にわが身を振り返る時間を作りたいものです。

